**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第８２回　（２０２１年１２月２６日）**

**・勉強範囲：「第四章　在家の人への助言」４３頁**

**～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～**

今日は少し戻って説明します。なぜなら大事なポイントなので。

**📖４３頁下段 後ろから１１行目**

**音楽家「師よ、神を悟るにはどうしたらよいのでございますか」**

**師「バクティが、たった一つの大切なものだ。たしかに神はすべてのものの中にいらっしゃる。それでは、どういう人を信者と言うのか。その心がつねに神を思っている人だ。**

**（解説）**

このシュリー・ラーマクリシュナの答えは、「大切なものはいろいろあるが、その中で一番」という意味です。バクティ・ヨーガ、ギャーナ・ヨーガ、カルマ・ヨーガ、ラージャ・ヨーガなどいろいろな道があるが、「それぞれが宗教の道・悟りの道であり、そのどれを通ってもよい」、そして「それらのうちで、バクティ・ヨーガが一番大切である」ということです。

**神への愛がなければ霊的実践はドライになる**

つまり、どのヨーガにおいてもバクティが大事だ、ということです。なぜなら神への愛がなければ、霊的実践は訓練（discipline）という無味乾燥で味気ないドライなものになってしまうからです。すると実践へのやる気に影響します。

愛がなければ本当のやる気は出ません。ですからギャーナ・ヨーガの実践者はブラフマンを、ラージャ・ヨーガの実践者はパラマートマンを、真理を愛さないとなりません。バクティとは愛という感情ですが、感情が無ければ心はドライになりませんか？

たとえば親は子供を愛しているから、その子を養い育てるためにどんな仕事もいといません。実際どの親もそれを自然にやっていますが、そのやる気が出るのは子供を愛しているからではありませんか？　しかし同じ親でも、会社の社長は自分の働きの対価をくれる人であり、愛の対象ではないので、ドライな「義務感」による働きとなりそれがやる気に影響します。しかし愛があったら仕事が大変でも気にせず働きます。

「愛という感情がやる気を起こさせる」ということは、霊的実践においても言えることです。逆に言うと、霊的実践であっても神への愛がなければ義務になります。たとえば「グルが『神の御名を毎日少なくとも二回、１０８回ずつ唱えなさい』と言ったから」という理由で機械的に行う実践は、義務となり苦行（discipline）となって、実践がドライになります。すると実践が進まず、時にはやめてしまうこともあり得ます。

ですから信者は実践がドライになることについて、とても気をつける必要があるのですが、そこで「バクティ」が重要となるのです。バクティがあれば、徐々に、でも必ず、実践へのやる気が起きるからです。バクティがあれば、神を瞑想しよう、マントラを唱えよう、神について考えよう、神の御名を唱えよう、神についてもっと学ぼうと思いますし、実際にそうします。そのために「バクティが一番大事」なのです──誰のために？　求道者のために。

**バクティとは何かをはっきり理解する**

では「バクティ」とは何でしょうか？

（参加者）信仰。

たしかにバクティのは「信仰」です。ですがは何ですか？

（参加者）神を愛すること。

（参加者）神への愛。

それはそうですが、たとえば「神への愛」と「普通の愛」は両方とも愛ですが、何が違いますか？　私が言いたいことは、神への愛の特徴をはっきり理解しなければ、私の質問の答えは「バクティ」の翻訳を答えてそれで終わり、ということです。『ラーマクリシュナの福音』の中にはバクティ、バクティと何回も出てきているのに、字面だけ読んでいては「神への愛」「神にたいする愛」だけで終わってしまいます。しかしそれではバクティを真にイメージして理解したとは言えません。そこで、バクティと普通の愛（例：親の子供への愛、恋人同士の愛、友達同士の愛）との違いをはっきり理解する必要があるのです。

では再度質問します。普通の愛と比べて、バクティはどのような点が特別ですか？

（参加者）神への愛はlove and devotionなので、自分自身を捧げる、わたくしがない、神にすべてを捧げるというイメージを持っています。

OK、今までの皆さんの答えは間違いではないです。もう少し深く考えると？

参加者）見返りのことを考えない。求めない。

OK、神への愛のポイントとしてそれは入っています。けれどもヴィディヤー・シャーゴルのように、神を求めない人の中にも見返りを考えずに奉仕した人もいます。OK、皆さんはバクティについての大体のイメージを持っているようですが、今日はバクティの定義・特徴について、詳しく説明したいと思います。

**文法的説明**

「バクティ」（Bhakti）は、動詞バッジ（板書：Bhaj）が語源です（バジャンも同じ語源です）。この動詞の意味は、礼拝する（to worship）、尊敬する（to respect）、敬礼する（to honor）、お世話する（to serve）、愛する（to love）、従う（to follow）。

これらの意味は、神への愛においても、人間関係においてもあてはまることはわかりますね？　後者の例としては、学生が先生を尊敬する、弟子がグルを尊敬する、在家が出家を尊敬する、子は年老いた親を世話する、親は子を愛する、夫は妻を愛する、妻は夫を愛するなどがあります。

──「霊的な愛」（spiritual love）と「普通の愛」という言葉を使って話していきますが──

では霊的な愛の対象は何でしょうか？　それはグル、聖典、神の３つ。つまり弟子のグルへの愛、聖典を敬い愛する、神を敬い愛するという３つです。普通の愛の対象は、世俗的なもので、それは後で説明します。

**バクティのさまざまな定義**

**［講義中の文献👉『ナーラダ・バクティ・スートラ』日本ヴェーダーンタ協会　２０１５年］**

ところでバクティの定義についてはいろいろな興味深い意見があります。

①プララーダ（Prahlāda）の定義

『バーガヴァタム』に出てくる神の信者プララーダは、「ある世俗的なものを激しく愛する（intense love）ように、信者が神を愛したら、それがバクティである」と言っています。

たとえば金持ちの金銭への愛は──それは「愛」というより「執着」ですが（執着の中に愛のアイディアが潜んでいるでしょう？）──その人の人生の目的はたった１つ、「もっともっとお金を稼ぎたい」ということで、家族、名声、快楽などは二の次です。またお酒が大好きな人、ドラッグが大好きな人も同じ。特に後者はドラッグを得るためなら犯罪さえいとわず、ドラッグに依存してドラッグのために生きているみたい、ドラッグがなければ死んでいるみたいに生きています。彼の人生のすべてがドラッグに捧げられているのです──

それと同じ度合いほどに激しく神を愛するのがバクティであると、プララーダは言っています。（ちなみに、神が対象になると「執着」という言葉は使わず、「愛」という言葉になります［＊永遠絶対なものについて執着とは言わない］）

②ヴィヤーサ（Vyāsa）の定義

「神への儀式的な礼拝を好きになり、いつもそれを行うことがバクティである」と言っています。［👉『ナーラダ・バクティ・スートラ』第１６節：ｐ66］

ところでいま参照している本は、当協会から出版された『ナーラダ・バクティ・スートラ』です。これはブーテシャーナンダジーが来日して当協会で行った講義を、録音テープから起こして英語で出版し［👉”Narada Bhakti Sutras” Swami Bhuteshananda (Advaita Ashram)］、それを翻訳したものです。内容はバクティについての大変素晴らしい説明になっています。

③聖者ガルガ（Garga）の定義

「神と、神の化身についての名前・話・教え・生涯・性格・遊びについて、いつも聞いていたい、話していたい、勉強していたいと思うこと。神の御名をいつも唱えたい、神の栄光（glory）をいつも歌いたいと思うこと。その状態がバクティである」と言っています。［👉『ナーラダ・バクティ・スートラ』第１７節：ｐ67］

④シャーンディリャ（Shāndilya）の定義

「神は自分の魂である。自分の魂は本来神である。その魂を尊敬し、最も好きになり、それを悟るためのすべての障害を放棄すること。それがバクティである」と言っています。［👉『ナーラダ・バクティ・スートラ』第１８節：ｐ67］

神は自分の魂として、自分の中におられます。つまり神を悟るとは、自分の魂を悟るということです。そしてその悟りの道には執着や欲望などさまざまな障害がありますが、それら全てを放棄する。それがバクティであるとシャーンディリャは言っています。

⑤ナーラダ（Nārada）の定義

「全てを神に捧げる。自分の全ての考え、全ての仕事、全ての働きを神に捧げる。自分の身体、感覚、心、知性、魂、全てを神に捧げる。これがバクティの１つの特徴である。そしてもう１つは、神を1秒でも忘れたら心がとても痛くなる。この2つの特徴がバクティの定義である」と言っています。［👉『ナーラダ・バクティ・スートラ』第１９節：ｐ68］

では私たちの状態はどうですか？　神を1秒でも忘れると、心が痛くなっていますか？──それがバクティの状態であるかどうかの基準です。

「神をいつも覚えている」というのは「神と私はいつも一緒」、「神を忘れている」というのは「私は神から離れている」ということです。もちろんこれらは肉体的な次元の話ではありません。たとえ祭壇の前に座って神の写真の近くでその写真を見ていても、心が神以外のことを考えているなら「神を忘れている」ことになるのです。同じ家に住んでいても心が離れている家族の場合や、離れて住んでいても想い合っているという人間関係を連想すればわかるでしょう。

「神から離れている」と気づいた途端に心が痛くなること────それをサンスクリット語で「タット　ヴィスマラ　パラマ　ヴャクラタ」（タット＝神を、ヴィスマラ＝忘れる、パラマ＝大変な、ヴャクラタ＝心が痛い）と言いますが──「あれ、シュリー・ラーマクリシュナのことを全然忘れていた、1時間も2時間も過ぎたがシュリー・ラーマクリシュナのことを一度も思い出さなかった」と気づいたとき、心がとても痛くなるのが本当の信者です。そのような熱望（yearning）がナーラダの定義であり、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが強くおっしゃっていたことです。

その最たる例がゴーピーたちで［👉『ナーラダ・バクティ・スートラ』第２１節：ｐ71］、彼らは一秒でも神（クリシュナ）を忘れると心が痛くなりました。ゴーピーたちは「弟子」のシンボルです。ゴーピーたちが本当に存在していたのかどうか（またはイエスがいたかいないか、釈迦がいたかいないかも）は大事なポイントではなく、ゴーピーたちの熱望（yearning）というアイディアが、信者にとっては重要です。

⑥『ナーラダ・バクティ・スートラ』の第2節［👉『ナーラダ・バクティ・スートラ』p23］

次は第2節での定義です。読んでください。

（参加者）「バクティは、彼（神）への至高の愛のようなものであると述べられている」

至高の愛、サンスクリット語でパラマプレーマルパ。パラマとは、パラブラフマンやパラマートマンのパラマと同じで、「至高の」「最も偉大な」「絶対の」という意味です。ではなぜ神への愛は「至高」（パラマ）と言えるのか、その量や性質や性格について、普通の愛と比べて考えてみましょう。

・量

普通の愛、たとえば夫婦の愛について一般的なところを考えてみると、その愛の量が最初から最後まで一定であることは稀です。多くのケースでは徐々に衰えます。ですが霊的な愛は衰えません。衰えるどころか徐々に増します。それも無限のように、限度なく増えます。

こんな笑い話があります──あるお年寄りが長年の友達の家に遊びに行くと、友達は自分の奥さんに「スウィーティ、お菓子を持ってきてくれるかい？」「ハニー、お茶を出してくれるかい？」と話しかけていました。英語でスウィーティやハニーと言うのは自分の大好きな人に使う言葉です。そこで「５０年も前に結婚したというのに、君はまだそんなに奥さんのことを愛しているのだね。素晴らしいことだ」と言うと、友達は小声でこう答えました、「実は奥さんの名前を忘れちゃったのさ。だからハニーとかスウィーティと呼んでいるんだ」

これは結婚当初の愛が徐々に衰えていった例です。あるいは孫ができたら、親の子への愛は衰えるかもしれません。親が大変なときに子供が面倒を見なかったり、親の意見を無視して老人ホームに入れたりしたら、親は子を批判もするかもしれませんが、それは愛の衰えのしるしであり、世俗的な愛、たとえば人間の愛は、いつもそうです。

しかし神への愛は増えます。神も無限、神の愛も無限だからです。それが特徴です。

・条件

普通の愛は、いろいろなもので限定されて条件（condition）があります。たとえばreciprocity（相互主義）、つまり「私はあなたを愛します、だからあなたも私を愛さないといけません」という愛はとても一般的ですが、それはnegotiation（ネゴシエーション、交渉）のようです。ですがほとんどの人間関係がそうでしょう？　「あなたは私を全く愛していないが、私はいつもあなたを愛している」というのはとても稀なことです。

しかし霊的な愛には条件がなく（No condition）、信者は「私は神を愛する。神が私を愛しているかどうかは関係ない」と考え、信者は神の愛をチェックしたりしません。それにどのようにチェックするというのですか？　神に祈り、その願いを聞き入れてもらったときですか？　多くの人が、神が願いを満たしてくれないのは神が私を愛していない証拠だと考えますが、本当の信者は「私は神が好きだから神を愛します」と考え、神が私を愛しているか愛していないか、神が私の前にあらわれるかあらわれないか、神が願いを満たしてくれるかくれないか、などと限定して考えませんし、自分の願いのための条件も出しません。

・愛の対象

次は愛の性質・性格についてです。

普通の愛について分析し、その源までたどっていくと「自己愛」、英語で言う「self love」に行き着きます。たとえば、もちろん親は子を愛していることに間違いありませんが、それを内省して分析して愛の源までたどると、「私の子供だから愛している」ことがわかります。他人の子に対しては同じように思っていないことがその証明です。普通の愛の対象は、実は、「私」「自分」「自己」なのです。

ですが神への愛は「self love」ではなく、「Love of the Self」です。それは自分の中に魂として存在している神を愛することであり、同じ自分であっても大文字の自己（Self）、つまり魂［＊真我］が対象なのです。それに対して普通の愛の対象は小文字の自己（self）、つまり自分の身体、感覚、心、知性、自我です。（英語で考えてみると分かりやすいと思います）

そしてSelf/selfへの愛の結果も、それぞれで異なります。小さい自己を愛した結果、束縛、執着、期待、失望、ストレスが生じ、大きい自己を愛した結果、自由、本当の幸せ、安定した幸せ、平穏を得ます。

・愛の性質（有限か無限か、一時的か永遠か）

普通の愛の対象は、いろいろな原因で無くなる（亡くなる）ので、一時的で有限です。ですからその愛自体も一時的で有限です。一方、霊的な愛の対象（神）は無限で永遠、その愛も無限で永遠です。神も永遠、神への愛も永遠──それがバクティのイメージです。

⑦『ナーラダ・バクティ・スートラ』の第３節を読んでください。［👉『ナーラダ・バクティ・スートラ』p31］

（参加者）これ（信仰）は不滅のようなものである。

なぜ不滅なのですか？　永遠ですから不滅です。よってそれへの信仰を得た信者は不滅に、不死になります。もちろん肉体レベルではなく、魂のレベルで、アムリタ、不死になります。

この「不死」というのは「至福」「永遠」「無限」をイメージしてください。神への愛の結果、その至福、永遠、無限を得るのです。

**（賛歌奉献）**（映像データの１：３９：３５頃）

「シャマ　マーキ　アマル　カロ　レ」（わが母カーリーはほんとうに黒いのか）

［👉『ラーマクリシュナの福音』の賛歌　p71、p 480、p 517、p 734］

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上